



民主党の新人衆議院議員

石井 章 さん

二部法学部に在学中

東プロロック(単独31位)で出馬し、初当選を果たした。期待の新人として、テレビ番組などにも出演している。取手市議時代、「あきら活動レポート」を地区ごとに発行し、地域に根差した地道な活動を続けてきた。「21年間の議員としての活動を評価していただきたいと立候補を決意しました。暮らしやすい環境をつくり、人のために力を尽くすのが政治。舞台は変わっても、その思いにブレはありませんと決意を語る。

茨城県土浦第一高校卒業後、地元の高橋工業に勤務していたときに最初の転機があった。「付き添いで参加した経営者の研修で、「コンビニエンスストア」を初めて知り、これからの時代、必ずヒットすると直感したんです。25歳の時に友人と有限会社を設立し、県内2店舗をオープン。時代の波に乗り、業績を拡大。31歳で藤代町議となり、地域の子どもの健全育成に力を注いできた。茨城県子ども会育成連合会理事、取手市子ども会育成連合会会長などを務め、500人規模のサマーキャンプを毎年実施してきたきっかけは、小学校「人のために」率先して実行するバイタリティーは、小学生のときからだといふ。「家の近くに養護施設があったのです。子どもを育てるのに、そこに寄付をしたが長く続ける秘けつです。二部のいいところを、周囲の場で得たものを、周囲に還元してもらえたらいい」と期待を話す。

取手市議から国政へ

二部法学部3年次に在学する石井章さんは、第45回衆議院議員選挙に比例北関東ブロックで、

「これまで経験してきたビジネスと政治をブラッシュアップさせよう」と入学した二部法学部では、学生から「元貴」として慕われている。山田創一教授の民法総論、小林弘和教授の地方自治論は特に興味深く聴いているという。「自分の子どもは近い同級生や、私の年の近い先生方と議論したり、飲みに行ったりという日々は、今までにない刺激的な経験。どんなに忙しくなっても必ず卒業し、大学院で、さらに学びたいと考えています。小林教授は「社会とかかわりながら学べるのが、二部のいいところですよ。国政の場で得たものを、周囲に還元してもらえたらいい」と期待を話す。

本多さん4連覇

全日本ライフセービング選手権(平12商、東京消防庁)は男子ビーチスプリントで4連覇を果たした。



サーフスキーレースで健闘した菅野さん(日本ライフセービング協会提供)。内には本多さん

10月11・12の両日、片瀬西浜海岸で開催された第35回全日本ライフセービング選手権で、本多辰也さん(平12商、東京消防庁)は男子ビーチスプリントで4連覇を果たした。

また、男子サーフスキーレース10位に入った菅野宏さん(平5経済)は20年連続出場。かつては世界選手権にも出場した実力者だ。

活動拠点は学生時代からの静岡・下田だが、住まいは若手県。時期によっては氷が張る田瀬ダムで練習を重ねている。

「人命救助には日々のトレーニングの積み重ねが大切。これからも長く続けていきたい」と語った。

法学研究会が健闘

10月4日、立教大学で行われた関東学生法律討論会で、法学研究会が総合2位に、同研究会の嶋田陽美さん(法2)が立論の部で3位に入賞した。2年次代表の畑聡一郎さんは、「来年春の大会は本学で開催されるので、1位になれるよう頑張ります」と話している。



10月4日、立教大学で行われた関東学生法律討論会で、法学研究会が総合2位に、同研究会の嶋田陽美さん(法2)が立論の部で3位に入賞した。2年次代表の畑聡一郎さんは、「来年春の大会は本学で開催されるので、1位になれるよう頑張ります」と話している。

法学部・梅本吉彦ゼミ OB・OG会



民法・民事訴訟法の専門ゼミとして、29年間の長きにわたり開講され、主に法曹界・金融界に多くの人材を送り出してきた法学部・梅本吉彦教授ゼミでは、年一回開催しているOB・OG会を10月3日、神田キャンパスで開いた。写真。米国留学から帰国した弁護士をはじめ、多くの現役弁護士や金融マン、その他各界で活躍する先輩、本学法科大学院を修了し、今年度新司法試験に合格した2人も含め卒業生22人、3・4年次生30人が参加した。卒業生はかつての梅本教授の厳しい指導の話で盛り上がり、在学生は卒業生から、就職について貴重なアドバイスを受け、有意義な時間を過ごした。

梅本教授は2011年3月に定年退職されるので、在学生が合同で出席する会は今年が最後となる。卒業生からは、歴史あるゼミに幕が下ろされることを惜しむ声も寄せられた。フィナーレには教員全員から梅本教授に花束を贈呈し、全員で恒例の記念写真を撮影した(4年次・青木知香)。

クリケット愛好会創設20周年記念パーティー



専修大学クリケット愛好会は、10月11日、創設20周年記念パーティーを神田キャンパスで行った。創設した第一期生から、23期生にあたる1年次生まで、約1000人が出席し写真。また、特別ゲストとして、日本ツアーで来日していたクリケット発祥の地であるイギリスのクリケットクラブの方々にも参加していただき、大いに盛り上がったと同時に、本場イギリスの選手たちと交流もでき、貴重な体験となった。

残念ながら日本ではまだ、あまり知られていないクリケットだが、実は野球の原型とも言われており、競技人口はサッカーに次いで世界第2位を誇っている。11人でプレーすることや、ベースを使用しないこと、またフェールがないことなどが野球との違いであり、ルールは少々難解だが、一度理解すると、とても魅力的なスポーツである。

これからも、愛好会の繁栄とともに、クリケットというスポーツが日本に広まってくれることを願っている(法学部3年次・谷越静佳代表)。

大学に勤める教員は最新のプレゼンテーション、自分の研究に関する設備が備えられている。しかし、生田キャンパスを訪れた学生会員の多くが、本学の設備の充実の声を口々に発していたのである。

9号館や10号館が完成する前は、生田キャンパスで大会を開催することはほぼ不可能であった。しかし、現在は、少なくとも規模と設備においては、どの大学にもひけを取らない。

本学で学ぶ学生や教職員は、このような恵まれた研究教育環境をもち、もっと誇りを持ってほしい。

生田キャンパス再考

緑地帯

防止委員会には、年間、数件の相談があります。一つの案件の対応を終えたとき、少し肩の荷が下りた気がする一方で必ず不安になります。同じようなケースが学内にあるのではないかと、そして、一人で悩みを抱えている人がいるのではないかと、被書を受けている人にとって非常に相談しづらい問題であると思います。「恥ずかしくて誰にも相談できない」「私さえ我慢していればいいんだ」――実際に自分が被害者となった場合には、多くの人が、そのように考えてしまっているのではないのでしょうか。自分一人で悩みを背負ってしまったり、それは問題の解決から遠ざかってしまうものだと私は思います。

セクハラの問題に限らず、何かを相談する場合には勇気が要ります。けれども、まず第一歩を踏み出さなければ、現状を変えることは難しいのです。防止委員会では専修大学ホームページ「学生生活」の中に相談受付窓口を設けています。もし、あなた自身、また、あなたの身近なところで、セクハラと思われる行為が行われているのであれば、勇気を「声」に変えていくことが大切ではないでしょうか。

大学で何の不安もなく学生生活や仕事をすることができ、そのような環境を維持するためには、学内の構成員一人ひとりがハラスメントに対する意識を持つことが必要です。セクハラには、さまざまなケースがあります。防止委員会では、それぞれの相談内容を受け止め、その対応を積み重ねながら、キャンパスからハラスメント問題をなくすための防止活動に生かしていきたいと考えています。

(岩崎 俊彦)

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から